

第3章 多賀城市の歴史と指定地の文学史的背景

1 多賀城市の歴史

多賀城市域は縄文時代前期から人の生活が営まれた地域であるが、その歴史のなかで特筆すべきは、8世紀に中央政府が東北地方の政治的・軍事的拠点をおの地に置いたことである。古代の多賀城には、万葉集の編者といわれる大伴家持をはじめ、教養豊かな官人が多く赴任してきたことで、古代東北における文化的拠点ともなっていた。都から赴任した官人たちは、みちのくの情景を想像力豊かに和歌の中に描いていった。こうして遠い都でみちのくの多くの名所が歌の中から生まれた。これらが平安時代以降歌枕となって後世に名を留め、長い歳月を経て、江戸時代に至り公私に渡る歌枕の保護顕彰活動を経て、松尾芭蕉の『おくのほそ道』につながったのである。ここでは、まず多賀城市の歴史を概観しておく。

(1) 縄文時代～古墳時代

多賀城市の歴史は、約6,000年前の縄文時代前期に遡る。多賀城跡内の丘陵には縄文時代前・中期の金堀貝塚や五万崎遺跡が、海に近い市東部には、縄文時代晩期の橋本囲貝塚などがあり、狩猟・採集・漁撈を基盤とした生活が営まれていたことが分かる。

弥生時代では、市東部の柘形囲貝塚から稲籾の痕跡が付いた土器が発見され、東北地方の弥生文化研究の出発点となったことが特筆される。また、市西部の新田遺跡や山王遺跡から弥生時代中期の水田跡が発見され、狩猟採集社会から農耕社会へと順調に発展していたことがうかがえる。

古墳時代になると、市西部の新田遺跡や山王遺跡などの微高地や高崎遺跡の丘陵上に堅穴住居を構えた集落が形成され、低地に水田を営んでいた様子が明らかになる。古墳時代の終わり頃になると、丸山囲古墳群、稲荷殿古墳の円墳や、大代横穴墓群、田屋場横穴墓群などの横穴墓も造営され、多賀城造営前の地方豪族の社会が明らかになっている。

(2) 古代多賀城の時代

多賀城は、8世紀の初めに陸奥国の国府が置かれ、奈良時代には鎮守府も併置されたところで、古代東北における政治的・軍事的・文化的拠点としての役割を担っていた。その規模は約900m四方に及び、ほぼ中央に政庁が、城内の各所には実務官衙域や工房などがあった。また、多賀城の造営と同時に、附属寺院である多賀城廃寺が建立された。

現在多賀城南門内側に立っている多賀城碑は、藤原朝獯の多賀城修造を記念して建立された修造記念碑と見られる。南門を出た城外には、南北大路が延びている。これは、城下に広がっていた方格地割の基準となる当時のメインストリートであった。

(3) 中世

多賀城は、11世紀中頃にはその主要な機能を終えたと考えられている。一方で、平安時代末から南北朝時代にかけて、文献上には「多賀国府」の名が登場する。しかし、壺碑(つ

ぼの石ぶみ)を含む特別史跡内で多賀国府に相当する遺構は発見されておらず、その所在地には七北田川流域の仙台市東部の岩切から多賀城市西部にかけての地域を想定する説などがある。

文治5年(1189)、奥州藤原氏を滅亡させ、陸奥国を支配下に置いた源頼朝は、鎌倉への帰途多賀国府に立ち寄り、陸奥国内のことについては、藤原秀衡・泰衡の先例に従って取扱うようにとの指示を与えている。翌年伊沢家景が陸奥国留守職に任じられると、伊沢氏は留守姓を名乗るようになり、その後代々留守職を世襲し、国務を執り行った。

元弘3年(1333)、鎌倉幕府を滅亡させた後醍醐天皇が建武新政を開始すると、北畠顕家は陸奥守に任命され、義良親王とともに多賀国府に赴任した。後醍醐天皇と対立した足利尊氏が京都を支配下に置くと、顕家は奥州の兵を引き連れて尊氏を九州に敗走させ、京都を奪還する。しかし、奥州で次第に足利勢が勢力を強めると、顕家は国府を維持することが困難になって霊山に移り、やがて顕家が敗死すると14世紀中頃には足利方の支配が確立し、探題斯波氏が本拠を大崎に移すと、多賀国府の名も歴史から姿を消していった。

(4) 近世

慶長5年(1600)の関が原の戦いの後、陸奥国における伊達氏の所領が定まり、それに伴って多賀城市域も伊達領となった。伊達政宗は仙台城と城下町の建設をはじめ、大崎八幡宮、松島瑞巖寺、国分寺薬師堂なども造営し、上方の新しい文化を仙台にもたらし、一方、「地方知行制」により領内各地に配置された家臣は、野谷地開発を活発に行い、藩内の新田開発が進められていった。

「正保郷帳」によると、当時の市域は85.8%が水田という城下町仙台近郊の典型的水田地帯であった。宮城郡78か村のうち、壺碑(つぼの石ぶみ)が所在していた市川村、興井と末の松山が所在していた八幡村のほか、南宮、新田、山王、高橋、浮島、留ヶ谷、下馬、高崎、田中、笠神、大代の13か村が、現在の多賀城市域にあたる。

その中でも八幡村には、当地域最大の伊達家臣であった天童氏が居住していた。天童氏は、もとは出羽国天童城の城主であったが、最上氏との対立に敗れて奥州に移り、伊達政宗に仕えた。やがて天童氏は八幡村に在郷屋敷を与えられ、その周囲には家臣団や百姓の住まいが並んだ。その様子は、天和元年(1681)作成の屋敷絵図に見ることができ、現在の八幡地区のまち並みは、この絵図と大きく変わらないまま残っている。

寛文9年(1669)、仙台藩4代藩主伊達綱村は、八幡村の肝入であった家を「奥井守」に任じ、興井の保護にあたらせた。その伝統は近年に至るまで継承され、末の松山と合わせた地元住民の保護顕彰は近年まで継続される。

2 文学史的背景—歌枕

『おくのほそ道』は、歌枕を巡り、その現状を自ら確認することを一つの目的とした芭蕉の旅の紀行文である。すなわち、旅のそもそもの背景には平安時代以来語り継がれてきた歌枕の存在があった。ここでは、今回名勝指定された「壺碑(つぼの石ぶみ)」「興井」「末

の松山」の3つの歌枕について、以下にその成り立ちやその後の経緯を取りまとめておく。

(1) 壺碑（つぼの石ぶみ）

歌枕「壺碑（つぼの石ぶみ）」は、11世紀から12世紀にかけて出現した歌枕である。「つぼのいしぶみ」・「いしぶみ」などの表現で用いられた。顕昭の『袖中抄』（文治年間（1185～1190）成立）には、陸奥の奥の日本の東のはてにあり、坂上田村麻呂が弓の弭で石面に日本中央である旨を記したものと解説されている。西行や源頼朝など著名人を始めとして、多くの人々が、はるかなみちのくにあるとされた碑を歌に詠んだ。

「むつのくの おくゆかしくそ 思ほゆる つぼのいしぶみ そとの浜風」（西行）

「みちのくの いはで忍ぶは えぞ知らぬ かき尽くしてよ 壺のいしぶみ」（源頼朝）

多賀城の修造記念碑とみなされている多賀城碑は、発見当初から歌枕「壺碑」と関連付けられて有名になった。新井白石の『同文通考』によれば、万治・寛文年間（1658～1673）に土中から発見されたとされる。「壺碑」の発見は、当時の文人や学者により注目され、随筆や案内記に収められることにより、広く人々に知られることとなった。

(2) 興井

歌枕「興井」は、元来普通名詞であった「沖の石」が固有名詞化し、喧伝されて歌枕として定着したとされている。「おきの石」や「おきのゐ」などの表現で用いられ、『古今和歌集』小野小町の歌や『千載和歌集』の二条院讃岐の歌で有名になった。

「おきのゐて 身をやくよりも かなしきは 宮こしまべの わかれなりけり」

小野小町（『古今和歌集』）

「わが袖は しほひにみえぬ おきの石の 人こそしらね かわくまぞなき」

二条院讃岐（『千載和歌集』）

天和元年（1681）に在郷屋敷の調査の一環として作成された『宮城郡八幡邑天童氏屋敷ならびに家中・足軽屋敷絵図』には、百姓家に隣接して「沖石」と記載されていることから、この時期には現在地が「沖石」として定着していたことが分かる。

(3) 末の松山

歌枕「末の松山」は、古代歌謡として唱和され、最古の勅撰和歌集である『古今和歌集』（延喜5年＝905年成立）の「東歌」に選入されて伝えられた。

「君をおきて あだし心を わがもたば すゑの松山 浪もこえなむ」

（『古今和歌集』東歌）

この歌が都に伝播され、歌合の歌題になるほど有名となり、以後みちのくを代表する歌枕として、とりわけ愛の象徴の歌枕として数多くの歌に詠み込まれた。「末のまつ山」や「まつ山」、「すゑのまつ」などの表現で用いられた。

「ちぎりきな かたみにそでを しぼりつつ すゑの松山 なみこさじとは」

清原元輔（『後拾遺和歌集』）

「うらなくも 思ひけるかな 契りしを 松より波は 越えじものぞと」

紫上（『源氏物語』明石）

安永3年（1774）の「八幡村八幡社別当末松山般若寺」書上には、延宝年中（1673

～1680年)頃まで同寺に古鐘があり、それには「奉謹鐘鑄 奥州末松山八幡宮 大檀那介平景綱 大工藤原弘光 大工加当安吉 永仁七年二月朔日」の銘が刻まれていたと記されている。このことから、鎌倉時代には既に現在地付近が末の松山として定着していたことが分かる。

3 『おくのほそ道』と近世以降の歌枕保護顕彰活動

『おくのほそ道』は、松尾芭蕉が関東・東北から北陸にかけての古歌にまつわる歌枕の名所及び由緒・来歴の地を訪れた旅路(第6回)を、俳句を織り交ぜながら作品としてまとめ、ひとつの紀行文として完成させたものである。作品に記された歌枕ゆかりの地は、それぞれが古代からの古歌や歌人を偲ぶことができる優れた名所であることに加え、『おくのほそ道』という文学作品を構成する要素であり、一連としての価値を有するものでもある。

ここでは、名勝指定の基盤である『おくのほそ道』における「壺碑(つぼの石ぶみ)・「興井」・「末の松山」あるいはその前後の芭蕉の行程を再確認するとともに、『おくのほそ道』の関連箇所と『曾良随行日記』等の関連記事を掲載する。併せて江戸時代以降の歌枕保護顕彰活動、とりわけ「壺碑(つぼの石ぶみ)・「興井」・「末の松山」の3つの歌枕の保護顕彰活動について取りまとめておく。

(1) 『おくのほそ道』

元禄2年(1689)、松尾芭蕉は、「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」「漂泊の思ひやまず」と旅心に突き動かされ、弟子の曾良を同行させ、「白川の關」を越え「松嶋の月」を見ようと、遠く陸奥・北陸路の旅に出た。

念願の白河の関を越えた芭蕉は、福島県下にある歌枕の地を訪ねながら北上した。仙台藩領に入った芭蕉は、岩沼市にある【武隈の松】を訪れた。昔より二木として和歌に詠まれていた姿を彷彿とさせるように、植え継がれながら二手に分かれて伸びている松を見て、「め覚る心地はすれ」と感動し、「櫻より松は二木を三月越」の句を詠んだ。

名取川を渡り仙台へと入った芭蕉は、知り合った画工加右衛門の案内で【つゝじが岡及び天神の御社】や【木の下及び薬師堂】などの名所を巡った。【つゝじが岡】を訪れた芭蕉は、馬酔木が咲く季節の風景を思い浮かべた。【つゝじが岡】の一角に立地し、芭蕉が参拝した【天神の御社】は、榴岡天満宮として伝わっており、今も芭蕉を顕彰した多くの句碑がある。その後に訪れた【木の下】では、古歌に詠まれた由縁に想いを馳せ、伊達政宗が再建した【薬師堂】を参拝した。加右衛門が紺の染緒をつけた草鞋二足を餞別した風流な計らいに感銘し、「あやめ草足に結ん草鞋の緒」の句を詠んだ。

5月8日、朝のうち小雨の降る中、加右衛門が松島や塩竈を描いた絵図を手に仙台を出た芭蕉は、おくの細道の山際に十符の菅が生えているのを見つ、市川村に入り、低丘陵の上り口に立つ【壺碑(つぼの石ぶみ)】にたどり着いた。芭蕉は、碑文の内容を書き取り、『おくのほそ道』にも詳細に記している。壺碑を訪れた芭蕉は、これまでめぐってきた歌枕の名所が時間の経過とともに姿を変えているものばかりであったのに対して、この碑だけは

昔からの変わらぬ姿を留めているのを見て、泪もこぼれそうになるほど感動している。

【壺碑（つぼの石ぶみ）】を出た芭蕉は、野田の玉川や、八幡村の屋敷の裏にある【興井】などに足を運んだ。末松山宝国寺の裏手にある【末の松山】を訪れた芭蕉は、松の合間に墓が立っているのを見て、いつまでも変わらないようにと誓った男女の契りも、結局はみなこのような墓の下に帰ってしまうものかと悲しさを募らせた。なお、『曾良随行日記』には、「おもはくの橋」や「浮嶋」なども回ったことが記されている。

悲しみに暮れたまま、芭蕉は塩竈に戻り、塩竈の浦の夕暮れ時の鐘を聞き、夕月夜の海で近くに見える【籬が島】を眺めた。小舟が連れ立ち、魚を分ける声を聞き、「綱手かなしも」と古歌に詠まれた心に共感して「いとゞ哀也」と感じた。その夜、盲目の法師が田舎びた調子で奥浄瑠璃を語るのを聞いて、辺境の遺風を忘れずに伝えていることに感心した。

翌日の朝に塩竈神社を参拝した芭蕉は船に乗り込み、松島に向かい、雄島の磯についた。松島では、雄島や瑞巖寺等をめぐり、平泉へと旅を進める。

おくのほそ道 松尾 芭蕉

序章

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいつれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮春立る霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道神のまねきにあひて取もの手につかず、もゝ引の破をつゞり笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家
面八句を庵の柱に懸置。

(中略)

笠嶋

笠摺・白石の城を過、笠嶋の郡に入れば、藤中將實方の塚はいつくのほどならんと人にとへば、是より遙右に見ゆる山際の里をみのわ・笠嶋と云、道祖神の社、かた見の薄今にありと教ゆ。此比の五月雨に道いとあしく身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過るに、簑輪・笠嶋も五月雨の折にふれたりと、

笠嶋はいつこさ月のぬかり道
岩沼に宿る。

武隈

武隈の松にこそめ覺る心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずとしらる。先能因法師思い出。往昔むつのかみにて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせ

られたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠たり。代々あるは伐、あるひは植繼などせしと聞に、今将千歳のかたちとゝのほひてめでたき松のけしきになん侍し。

「武隈の松みせ申せ遅櫻」

と云ものゝ餞別したりければ、
櫻より松は二木を三月越

宮城野

名取川を渡りて仙臺に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て知る人になる。この者、年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて秋の氣色思ひやらるゝ。玉田・よこ野、つゝじが岡はあせび咲ころ也。日影ももらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。薬師堂・天神の御社など拝て、其日はくれぬ。猶、松嶋・鹽がまの所々畫に書て送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

壺の碑

かの畫圖にまかせてたどり行ば、おくの細道の山際に十符の菅有。今も年々十符の菅菰を調べて國守に獻ずと云り。

壺碑 市川村多賀城に有。

つぼの石ぶみは、高サ六尺餘、横三尺斗敷、苔を穿て文字幽也。四維國界之數里をしるす。「此城、神龜元年、按察使鎮守符將軍大野朝臣東人之所里也。天平寶字六年、參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣獨修造而。十二月朔日」と有。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置る哥枕、おほく語傳ふといへども、山崩川流て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪も落るばかり也。

末の松山

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造て、末松山といふ。松のあひあひ皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくのごときと、悲しさも増りて、鹽がまの浦に入相のかねを聞。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に籬が嶋もほど近し。蟹の小舟こぎつれて、肴わかつ聲聲に、つなでかなしもとよみけん心もしられて、いとゞ哀也。其夜、目盲法師の琵琶をならして、奥上るりと云ものをかたる。平家にもあらず舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て、枕ちかうかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから殊勝に覺らる。

鹽竈

早朝、鹽がまの明神に詣。國守再興せられて、宮柱ふとしく彩椽きらびやかに、石の階九仞に重り、朝日あけの玉がきをかゝやかす。かゝる道の果塵土の境まで、神靈あらたに

ましますこそ、吾國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寶燈有。かねの戸びらの面に「文治三年和泉三郎奇進」と有。五百年來の倂、今日の前にかびてそゞろに珍し。渠は勇義忠孝の士也。佳命今に至りてしたはずといふ事なし。誠人能道を勤、義を守べし。名もまた是にしたがふと云り。

松嶋

日既午にちかし。船をかりて松嶋にわたる。其間二里餘、雄嶋の磯につく。抑ことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡洞庭・西湖を恥す。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゞふ。嶋嶋の數を盡して、欵ものは天を指、ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり三重に疊みて、左にわかれ右につらなる。負るあり抱るあり。兒孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈曲をのづからためたるがごとし。其氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山ずみのなせるわざにや。造花の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡さむ。雄嶋が磯は地つゞきて海に出たる嶋也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有。将、松の木陰に世をいとふ人も稀稀見え侍りて、落穂・松笠など打けぶりたる草の庵閑に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求めば、窓をひらき二階を作って、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松嶋や鶴に身をかかれほとゞぎす 曾良

予は口をとちて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゞ時、素堂松嶋の詩あり。原安適松がうらしまの和哥を贈らる。袋を解てこよひの友とす。且杉風・濁子が發句あり。

瑞巖寺

十一日、瑞岩寺に詣。當時三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其後に雲居禪師の徳化に依て、七堂薨改りて、金壁莊巖光を輝、佛土成就の大伽監とはなれりける。彼見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

曾良随行日記 河合 曾良

日記本文

(元禄二年五月)

一 八日 朝之内小雨ス。巳の尅方晴ル。仙台ヲ立、十符菅・壺碑ヲ見ル。未ノ尅、塩竈に着、湯漬など喰。末ノ松山・興井・野田玉川・おもはくの橋・浮嶋等ヲ見廻り歸。出初二鹽竈ノかまを見ル。宿、治兵へ、法蓮寺門前、加衛門状添。銭湯有ニ入。

名勝備忘録

壺碑 一(ミチノク)ノイハデシノブハエゾシラヌカキツクシテヨツボノ石ブミ 頼朝
仙臺方塩竈へノ道、市川村ト云ノ屋敷ノ中ヲ右へ三四丁田ノ中ヲ行バ、ヒクキ山ノ上リ口ニ有。仙臺方三リ半程有。市川村ノ上ニ多賀城跡有。

興井 末ノ松山ト壹丁程間有。八幡村ト云所ニ有。仙臺方塩竈へ行右ノ方也。塩竈方三十町程有。所ニテハ興ノ石ト云。村ノ中屋敷ノ裏也。

末松山 塩がまの巳午ノ方、三十丁斗。八幡村ニ末松山宝國寺ト云寺ノ後也。市川村ノ東廿丁程也。仙台方塩がまへ行ば右ノ方也。多賀城ヨリ見ユル。

浮嶋 松、シホガマノ前タルモ、名ノミ也けりモ。

塩竈ノ浦ノ干瀉ノ曙ニ霞ニ残ル———ノ松モ。

仙臺方塩竈へノ道、市川ト云村方右ノ方へ十町程有。多賀ノ社也。式ニ有リ。多賀城ノ東也。今ハ田ノ中也。多賀ノ城ハ古ノ國守館舎也。末ノ松山打コシテ海見ユル也
末ノ松山ト壹丁程間有。

玉川 一タマサカモ。

汐風 タシホナガラ ミチノクモ。 岩城ノ内



第6図 『おくのほそ道』の行程と主な歌枕の所在地

(2) 近世以降の歌枕保護顕彰活動

江戸時代、幕府の文治政策とも相まって、各藩においても文教政策がとられるようになる。その一つとして、領内における名所旧跡整備が挙げられる。仙台藩による公的な名所整備は、17世紀中葉以降の4代藩主伊達綱村の代に積極的に行われた。みちのくの場合、各藩は学者を動員し領内の名所を調査させた。古典を精査し、「みちのく」ゆかりの記載のある文学上・歴史上の名所あるいは旧跡を克明に探索し、それを由緒がありそうなそれぞれの土地の伝承と結合させていったとされる。

一方民間では、『松嶋眺望集』や『日本行脚文集』の編著者である大淀三千風を中心とする俳諧師による名所整備が行われた。三千風は、『松嶋眺望集』に壺碑の全文を紹介するなど、歌枕の顕彰に功績を残した俳人であった。その弟子である加右衛門は、芭蕉に仙台の歌枕の地を案内した人物であり、仙台を離れ多賀城を訪れた際も、芭蕉は加右衛門が描いた絵図を見ながら辿りついたとされる。芭蕉がみちのくの歌枕の地を探訪できた背景には、こうした公私にわたる歌枕保護顕彰活動があったと言える。

18世紀以降になると、歌枕の地が絵図に描かれるようになる。仙台藩六代藩主伊達宗村が詠んだ和歌の直筆と狩野典信の日本画による『仙台領分名所手鑑』（18世紀半ば）、東北地方の旅日記に坂口員正の名所風景の絵図が添えられた『陸奥紀行』（明和6年（1769）写）、大崎八幡宮の神官であった大場雄淵が仙台藩内の自然・風俗・行事などを文章や絵で記述した『奥州名所図会』（19世紀初め）、芭蕉の辻から松島に至る街道沿いの名所十五景を描いた案内書『奥州仙臺名所尽集』（19世紀初め）など、歌枕の地を彷彿とさせる絵図が数多く残されている。

①壺碑

芭蕉が訪れてから2年後、徳川光圀は『大日本史』編さんのため家臣の丸山可澄を多賀城に派遣し、碑が苔むした状態であることを知った。可澄の報告を受けた光圀は、碑を修復し覆屋を建て、後の世まで伝えるようにとの書簡を仙台藩4代藩主伊達綱村に送っている。これを受けて間もなく、藩により最初の覆屋が建てられた。現在の覆屋は明治8年の建造と見られ、平成9年に解体修理が施され、今日に至っている。

そのほか、奈良で墨製造業を営んでいた古梅園が中心となり、仙台と塩竈の商人も加わって享保14年（1729）に現在の市川橋付近に「つぼのいしぶみ」道標を設置したり、大正4年（1915）に地元の学校などが大正天皇即位記念の植樹を行って「御即位紀年風致林」碑を建てたり、昭和2年に地元の俳人たちが芭蕉を顕彰して「芭蕉翁礼讃碑」を建立したりするなどして、多賀城碑周辺の保護修景が行われてきた。

多賀城碑の発見により、その周辺が古代にまでさかのぼる遺跡であるという認識が生まれた。この認識は、地元の人々にも浸透し、歌枕の保護顕彰と並行して多賀城跡の保護顕彰活動も地元を中心に早くから行われていった。

しかし、多賀城碑が手厚く保護されてきた一方で、多賀城碑が立地する丘陵は、宅地にされたり土取りが行われて大きく削平されたりするなど、現状は『おくのほそ道』当時の状況を留めているとはいえない。

②興井

安永3年（1774）に仙台藩に提出された「風土記御用書出」には、「4代藩主伊達綱村が寛文9年（1669）、八幡村の肝入であった家を「奥井守」に任じ、今でも代々その役を勤めており、そのため諸役が免除されている」という内容が記されており、仙台藩によって手厚い保護の体制がとられていたことがわかる。

明治31年（1898）の「宮城郡多賀城村大字八幡沖ノ井取締方願」「旧跡取締御指令案」（『宮城県庁文書』）によれば、明治8年（1875）に地元の住民が藩政時代と同様に保護管理をしたいと県に申し出たが、個人ではなく八幡村の管理とするように指示が出された。しかし荒廃してしまったことから、明治31年に八幡村住民2名が再度私費による管理を願い出て、地元住民による保護が再開した。その後も八幡の人々による管理が続けられ、近年では宝国寺と不磷寺の檀家を中心とした地元住民によって組織された「天宝乃会」により、清掃活動が行われていた。

③末の松山

末の松山は、みちのくの歌枕の中でも代表的なものの一つであり、資料の初現が鎌倉時代まで遡れることから、最も早くから歌枕として認識されており、この地に定着していたことが分かる。近年では、宝国寺の檀家による「縁有会」や前述した「天宝乃会」により、清掃活動などが行われる。

現在末の松山には推定樹齢が480年にもなる2本のクロマツと、宝国寺によって植樹された後継樹が2本残るのみである。これまで末の松山の様子を記録した文献のうち、『奥羽観蹟聞老志』（享保4年（1717））には「丘上、青松数十株有り」、『宮城郡八幡村風土記御用書出』（安永三年（1774））には「末松山之松 五本 但先年八九本ニ御座候処、御用木ニ罷成当時五本ニ御座候事」とあり、時代が経るにつれて松の本数が減少しているのが分かる。



多賀城碑の北側に立つ
「つぼのいしぐみ」道標



「興井」と「末の松山」が描かれた『奥州名所図会』の絵図